

都城市文化財調査報告書第36集

HIRA MINE — SITE

平 峰 遺 跡

— 民間分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1995年3月

宮崎県都城市教育委員会

序

この報告書は、分譲住宅地造成に伴い、都城市教育委員会が有限会社都城信用不動産の依頼を受けて発掘調査を行った、平峰遺跡の調査報告書です。

都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東に鰐塚山系、北西に高千穂峰といった山々に囲まれた広大な盆地のほぼ中心部にあり、「烏津庄」の中心地として、また九州自動車道をはじめとした国道・主要地方道が縦横に延びる南九州東部の中核都市として、古来より現代まで常に栄えてきたところです。

さて、当市の埋蔵文化財発掘調査は増加の一途をたどっており、それに比例して調査の成果への関心も高まってきつてあります。埋蔵文化財をはじめとした多くの文化遺産が正しく後世へ伝わるように、今後ともこうした調査に対する関係機関の方々により一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

本遺跡からは弥生・中世の遺構・遺物が出土しており、これらが埋蔵文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究資料として活用していただければ幸いです。

最後に、極寒の中で発掘作業に従事していただいた市民の皆様をはじめ、現場における調査や出土資料の整理から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました関係各機関や多くの先生方に対し心より厚く御礼申し上げます。

1995年3月31日

都城市教育委員会
教育長 隈元幸美

例 言

1. 本書は民間分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化課主事補米澤英昭が担当した。
3. 調査は平成7年1月11日から同年2月1日にかけて実施した。
4. 遺構実測図の作成は、米澤が中心になって行い、野口虎男・中原貞良・浜田寛・坂元トミ子・大盛祐子・下田代清海・阿久根敏恵・吉村則子・平川樹高の助力を得た。また、遺構・遺物分布図の作成には、テクノ・システム株式会社の遺跡調査システム“SITE”を用いた。
5. 遺物の実測は米澤・猪股幸千代・池谷香代子・雁野あつ子・水上和子が、製図は米澤が行った。
6. 遺構・遺物の写真撮影は、米澤が行った。
7. 使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
8. 本書の執筆・編集は米澤が行った。
9. 本書を執筆するにあたっては、都城市文化財専門員重永卓爾氏、都城市教育委員会矢部喜多夫氏・兼畑光博氏・横山哲英氏らのご教示を得た。
10. 本書に関する遺物・記録類（写真・図面等）は都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室で収蔵・保管している。
11. 本書では、下記の通りの略号を用いている。

SC-土 坑

SD-溝状遺構

SF-道路状遺構

P-柱 穴

目 次

序 文	1
例 言	2
目 次	3
第1章 序説	5
1. 調査に至る経緯	5
2. 調査体制	5
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	6
第3章 調査の記録	8
1. 調査の経過と概要	8
2. 遺跡の層序	8
3. 遺構・遺物	10
第4章 まとめ	33

挿 図 目 次

第1図 遺跡立地図	6
第2図 遺跡周辺地形図	7
第3図 調査区域図	9
第4図 遺構配置図	11
第5図 土層断面図	14
第6図 遺構配置図及び土層断面図 (1)	16
第7図 遺構配置図及び土層断面図 (2)	17
第8図 遺構配置図及び土層断面図 (3)	18
第9図 SD01内出土遺物実測図 (1)	19
第10図 SD01内出土遺物実測図 (2)	20
第11図 SD02内出土遺物実測図	21
第12図 遺構内出土遺物実測図	22
第13図 包含層内出土遺物実測図 (1)	24
第14図 包含層内出土遺物実測図 (2)	25
第15図 包含層内出土遺物実測図 (3)	26
第16図 包含層内出土遺物実測図 (4)	27
第17図 包含層内出土遺物実測図 (5)	28

表 目 次

第 1 表 出土遺物觀察表	29
---------------------	----

図 版 目 次

図版 1	34
図版 2	35

第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

平成6年11月25日付で、有限会社都城信用不動産より都城市教育委員会へ都城市平塚町の分譲住宅地(約2,100㎡)造成に伴う埋蔵文化財の有無の照会がなされた。当該地は昭和62年に同市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査による市内遺跡番号5010・平峰遺跡に含まれており、縄文～近世の遺物の散布が確認されていた。そこで都城市教育委員会では、遺跡の状態をより具体的に把握するために、平成6年12月8・13・14日、工事対象地に2m×2mのトレンチを6ヶ所設け、試掘調査を実施した(第3図)。その結果わずかな攪乱が見受けられたものの、遺物包含層の遺存状態は良好で、同層より弥生時代の土器・中世の陶器類、溝状遺構を検出した。これにもとづき、有限会社都城信用不動産と都城市教育委員会の間で協議した結果、取付道路部分350㎡において記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成6年12月26日には、両者間において委託契約が結ばれた。現場における発掘調査は平成7年1月11日から同年2月1日まで行い、引き続き遺物の整理を行った。

2. 調査体制

発掘調査は都城市から同市教育委員会が委託を受けて実施し、経費の運用は同市教育委員会文化課が行った。調査の組織は以下の通りである。

〔調査責任者〕	都城市教育長	隈元幸美			
〔調査総括〕	都城市文化課長	松山充			
〔調査事務局〕	同文化課長補佐	遠矢昭夫			
	同文化財係長	永野元保			
〔調査員〕	同主事補	米澤英昭			
〔発掘作業員〕	錫松雄	阿久根敏恵	吉村則子	藤田フヂ子	岩切ユキ子
	満生ミツ子	宮元孝子	南スミ子	立山君子	下田代清海
	野口虎男	坂元トミ子	中原貞良	大盛祐子	平川樹高
	錫芳明	釘崎トミ子	有水トミ	荒ヶ田エダ	曾原主吉
	楠幸礼エイ子	新田ハル子	荒ヶ田安夫	東前利雄	
〔整理作業員〕	猪股幸千代	池谷香代子	雁野あつ子	水上和子	

第2章 遺跡の位置と環境

平峰遺跡（市内遺跡番号5010：第1図）は宮崎県都城市平塚町字平長谷に所在する。都城市は宮崎県の南西部に位置し、東の鰐塚山系、北西の霧島山系といった山々に囲まれた盆地のほぼ中央部にある。その中で当遺跡は都城盆地中央、表原台地の南部にあたり、南北を流れる大淀川支流の浸食によって形成された舌状台地の付け根部分に立地する。標高は168mほどである。

当遺跡周辺には、縄文時代晩期の黒土遺跡をはじめとする古代以前の遺跡や、北郷（都城烏津）氏の居城であった都之城跡、中世末の墓群・油田遺跡、南北朝期に烏津氏久が陣を構えたと伝えられる場所などが点在しており、昭和62年の分布調査においても縄文～中世の遺物が採集されている。また、付近には孫字であろう「仮屋敷」・「中屋敷」と呼ばれる地域があり、以前に集落が存在していた可能性がある。



1. 平峰遺跡
2. 西原第2遺跡
3. 都之城跡（取添）
4. 都之城跡（主郭部）
5. 都之城跡（中之城）
6. 油田遺跡
7. 大岩田村ノ前遺跡
8. 黒土遺跡
9. 横尾原遺跡

第1図 遺跡立地図



第2圖 遺跡周辺地形圖

第3章 調査の記録

1. 調査の経過と概要

発掘調査は道路敷設全予定地（350㎡）について実施したが、敷設方向に合わせて、東西に細長いかたちとなった。

また、試掘調査において確認していた遺物包含層は霧島御池起源の縄文中期頃噴出とされる軽石（約4,300年前：通称黄ボラ）上に堆積している黒色系土層（Ⅲ層）である。調査は試掘の結果に基づき、バックホーによって表土（Ⅰ層）を剥ぎ取り、また現状は竹林であったため、竹根の除去も同時に行ったのち、10m×10mのグリッドを設け、その後、Ⅳ層（御池軽石層）上面まで手作業で掘り下げた。なお、現場における調査期間は平成7年1月11日から2月1日までである。

2. 遺跡の層序

本遺跡調査区域の地層はほぼ平坦に堆積していた。当地域において年代推定の基準となる桜高起源の文明軽石（白ボラ：Ⅱ層）、霧島御池起源の軽石（黄ボラ：Ⅳ層）の両火山灰層も良好に遺存しており、この両層間に遺物包含層である黒色系土層（Ⅲ層）がある。以下、各層について説明する。

Ⅰ層：白色バミスを含む褐色砂質土（旧耕作土）

Ⅱ層：文明軽石層（約420年前）

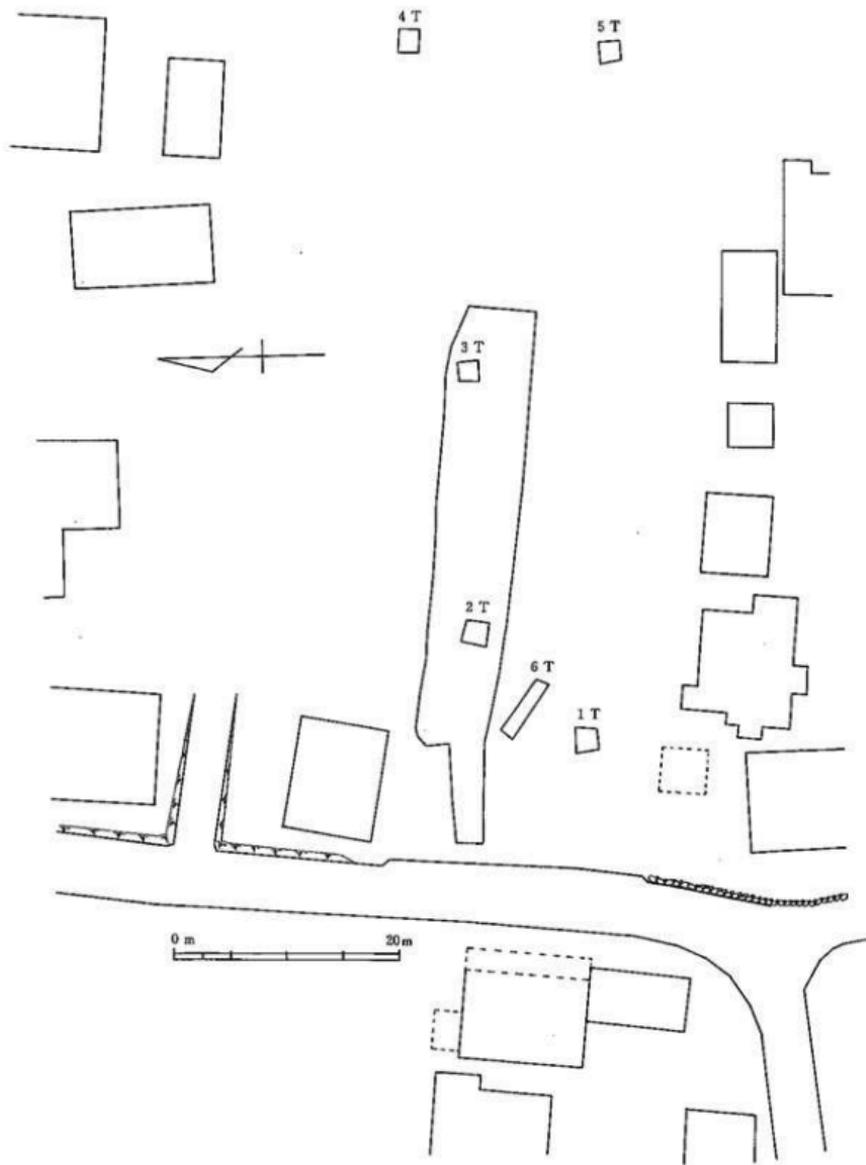
Ⅲ層：オレンジバミスを含む黒褐色粘質シルト

Ⅳ層：御池軽石層（約4,300年前）

Ⅴ層：黒色粘質シルト

Ⅵ層：アカホヤ火山灰（約6,300年前）

Ⅶ層：黒褐色粘質シルト（ⅥとⅧの漸移層）



第3图 調査区域图

3. 遺構・遺物

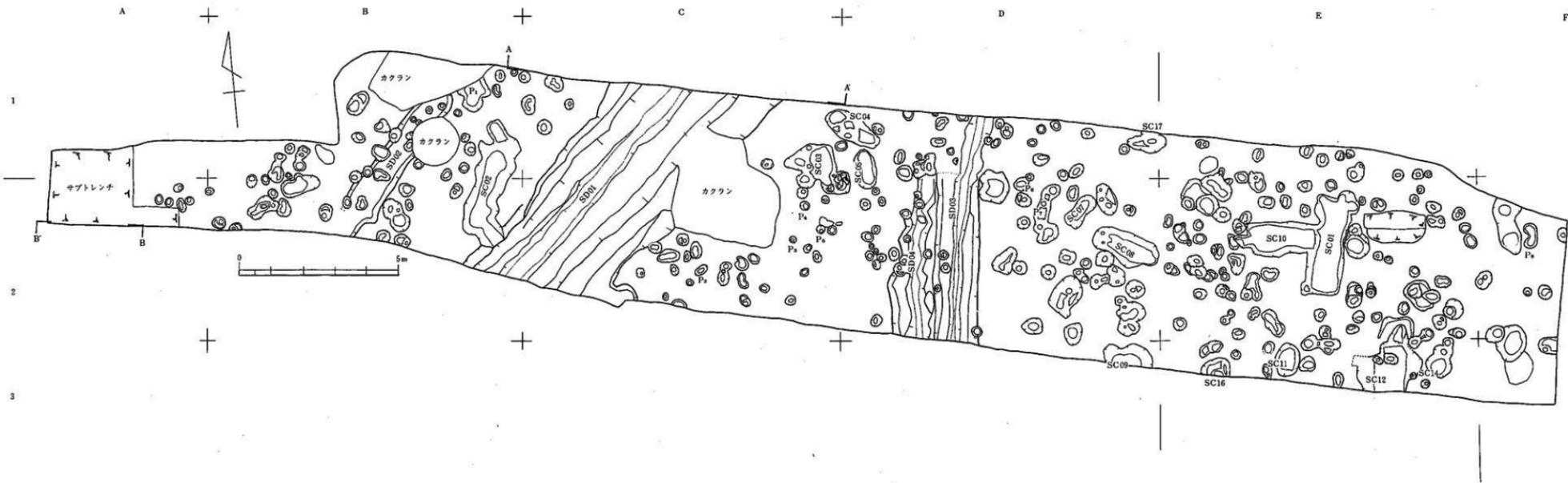
本遺跡の遺物包含層であるⅢ層より遺物を、またⅣ層直上で遺構を検出した。出土遺物の時期は弥生・古墳・中世で、遺構もこれに伴うものである。

溝状遺構 (SD01: 第6図)

C-1・2区で検出した。北東-南西に走行する。底面はアカホヤ直下層に達し、検出面からの深さ約1.6m、検出面での最大幅は4.2mを測る。部分的に攪乱による破壊がある。形状は箱堀状を呈し、最下部はさらに一段掘り下げられている。溝壁は西側が急で東側は比較的緩斜面を呈す。東側には3条の道路状遺構と思われる硬化面を伴う。埋土中からは多数の遺物が出土しており、主に上層から弥生土器が、下層からは中世の遺物が確認された。図示しうるもののみを第9・10図に示した。1・2は胴部片で、ともに2条の刻目突帯がみられる。2は突帯・刻みともに小さいが、1は突帯・刻みが2より大きい。3は甕の口縁部で、口唇部とその直下に刻目突帯を有する。刻目は小さく、外面にタテ方向のハケ目がみられる。4は刻目突帯を持つ。5は甕の口縁部である。口唇部は厚く、口唇部から膨らみをもたずに胴部へ連なる。内外に横位のナデ調整が施されている。6は壺の底部か。7~9は甕の口縁部である。7は口唇部がM字状の断面形態をしている。9は7同様M字状だが、口縁部の突帯が少し長い。またその傾きから、口縁部が内湾し胴部がやや膨らむタイプと思われる。10は1/2以上が欠損しているが、その形状から紡錘車と思われるものである。片面には指頭痕が明瞭に残る。推定径は8.0cmを測る。11~18は土師器である。11・12・14は坏、13は鉢型で、全ての底部には糸による切り離しの痕跡が見受けられる。また11・12・14には板状圧痕も確認できる。口径は11が12.1cm、12が13.2cmを測る。12・14は11に比べて口縁部が大きく開き、11は口唇部が外反する。15~18は小皿である。これも坏同様糸切りで、断面形からみれば16と17が類似する。各々の口径は15が8.3cm、16が7.6cm、17が7.7cm、18が8.0cmを測る。19~22は東播磨系(魚住系)とみられる須恵質陶器である。19は口径29.8cmを測る捏鉢の口縁部で、口唇部が外側へ張り出し、口唇部の丸みがないタイプで、内器面の後縁は明瞭である。口径32.0cmを測る20も捏鉢の口縁部であるが、口唇部は丸みを帯び、口唇部内側の後縁は緩やかである。21は胴部で外面はタタキ目が明瞭である。22は捏鉢の底部で、接地面と体部間の稜はシャープさを欠く。23は備前播鉢の胴部である。24~26は青磁である。24は碗の口縁部で鎮蓮弁文のタイプである。25は碗の底部である。26は24と同様であるが、23より蓮弁文が崩れている。27は敲石である。28は磨製石斧で、刃部は欠損している。

溝状遺構 (SD02: 第6図)

SD01の西側、B-1・2区で確認した。SD01と同様に延びるが、底は非常に浅い。埋土はⅢ層である。検出面における最大幅約1.1m、深さ約0.1mを測る。埋土中からは中世土師器が出土している。第11図に出土遺物を示した。29・30はともに糸切り的小皿である。29は口径6.8cmを測る。31は糸切りの坏の底部片である。



第4図 遺構配置図

溝状遺構 (S D03・S D04: 第7図)

ともにD-1・2区で切り合った形で検出した。走行方向は南北で、断面観察等によりS D04→S D03の時期差が見られる。最大幅はS D03が約1.4m、S D04が推定1.8m、検出面からの深さはともに0.2mほどである。また断面にはS D03中に硬化面(道路状遺構)が2面残っていた。埋土はⅢ層の黒色土系が基調であるが、上部には本遺跡ではほとんどみられない文明降下軽石(Ⅱ層)が堆積しており、このことからS D03・S D04は15世紀以前のものと推測される。第12図に出土遺物を示した。32は須恵片である。焼成不良のため黄褐色を呈しており、外器面にはタタキ目がみられ、また胎土には長石が見受けられる。33は壺型土器の口縁部である。断面はM字状を呈する。

道路状遺構 (S F01)

C-1・2区、S D01東で検出した。検出面はⅣ層上である。走行方向はS D01と同様に北東-南西である。遺存状態は断片的で、埋土はオレンジバミス混黒褐色粘質シルトである。

道路状遺構 (S F02)

C-1・2区、S D01内のS F01直下で検出した。南北に走行する。断片的に残存しており、幅員は不明で、遺物も確認されなかった。埋土はオレンジバミス混黒褐色粘質シルトである。

道路状遺構 (S F03)

C-1・2区、S D01内のS F02直下で検出した。走向・残存状態ともにS F02と同様である。

土坑 (S C01: 第8図)

E-2区で検出した。S C10と切り合っている。長径(南北)3.0m、短径(東西)1.1m、深さ約0.2mを測る。

土坑 (S C02: 第6図)

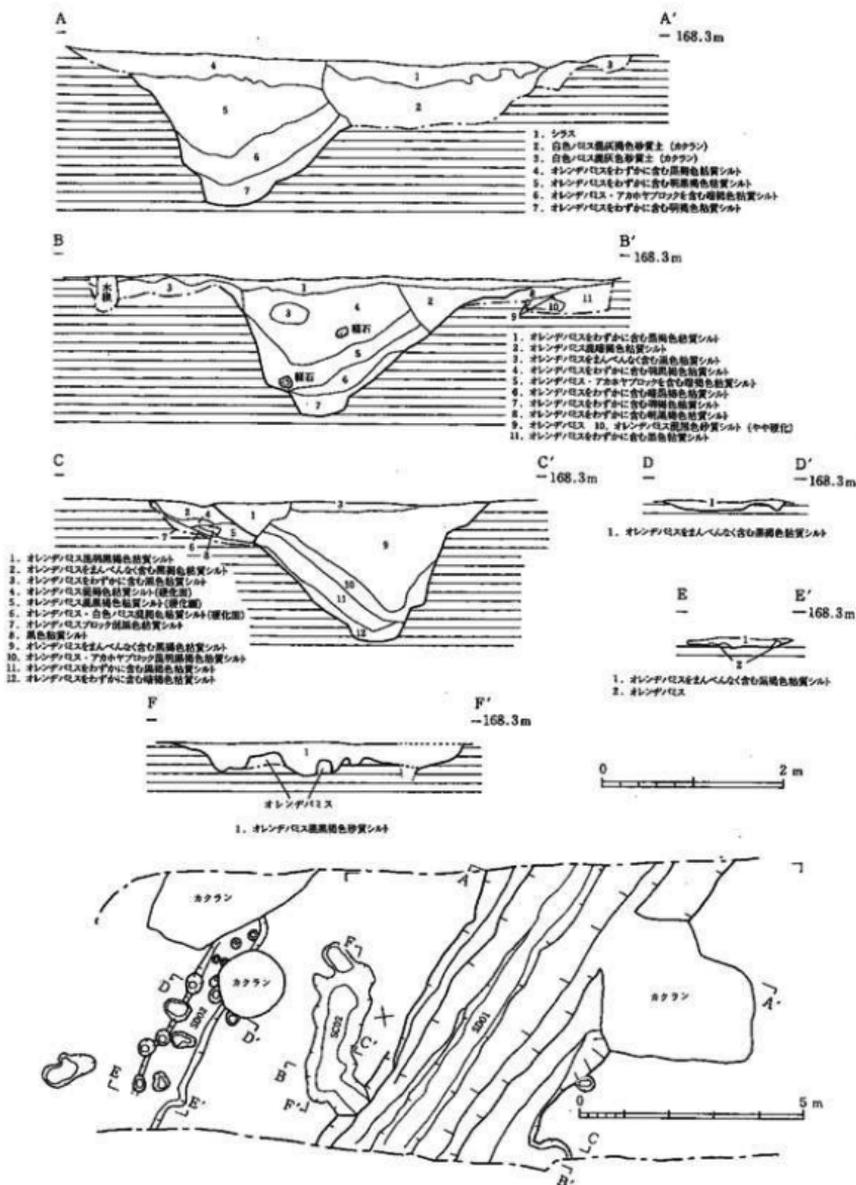
B-1・2区、S D01と切り合って検出。南北に細長く延びている。長径(南北)3.3m、短径(東西)1.0m、検出面からの深さは約0.2mを測る。

土坑 (S C03: 第7図)

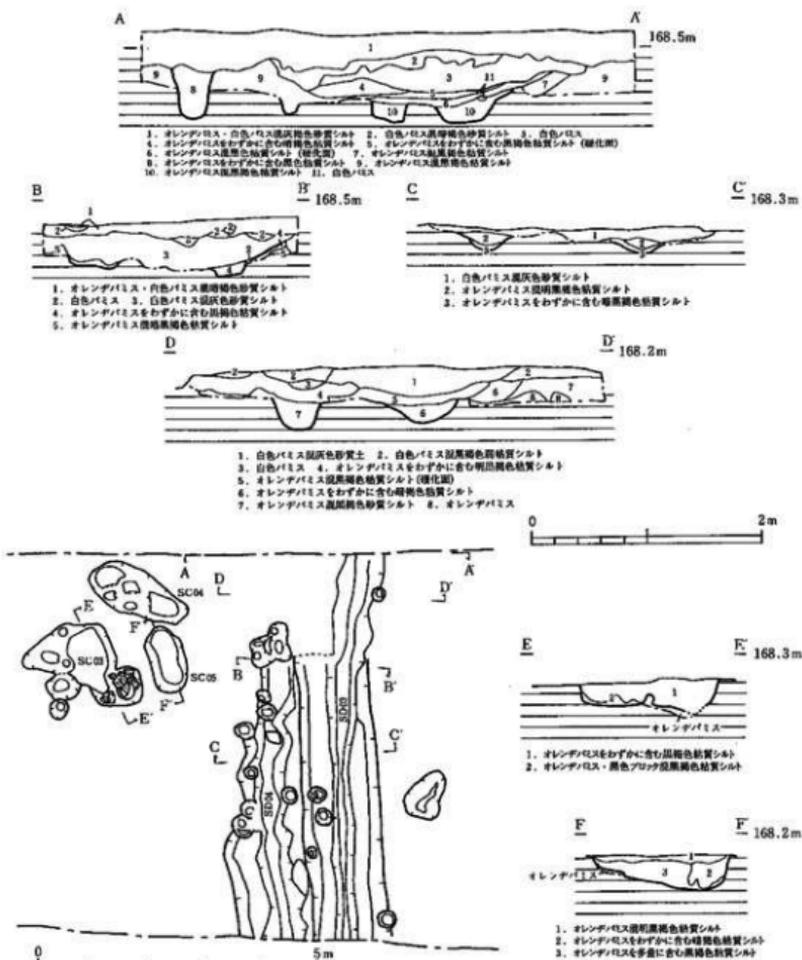
C-2区、S D04の西側で確認した。長径1.6m、短径1.4m、深さ0.2mを測る。いくつかの柱穴と切り合っており、南側に隣接する柱穴には複数の軽石が埋納されていた。

土坑 (S C04: 第7図)

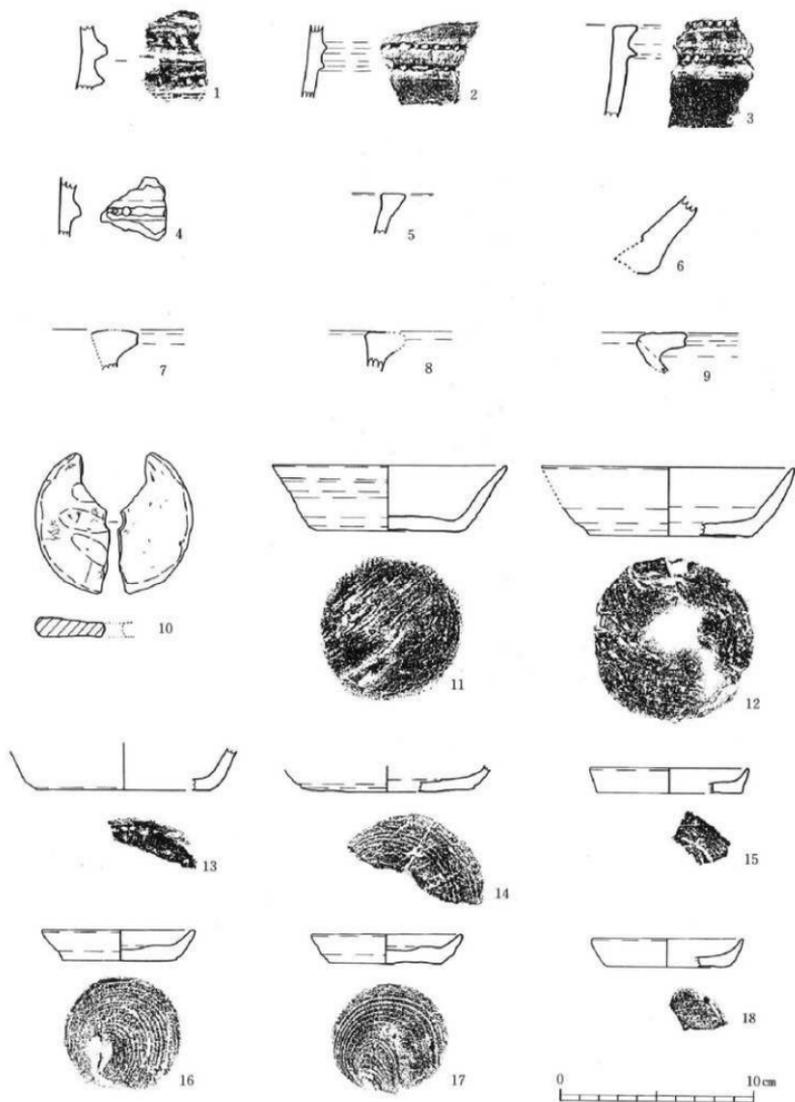
D-2区、S D04の西側、S C03に北接して検出。長径1.8m、短径0.9mを測る。



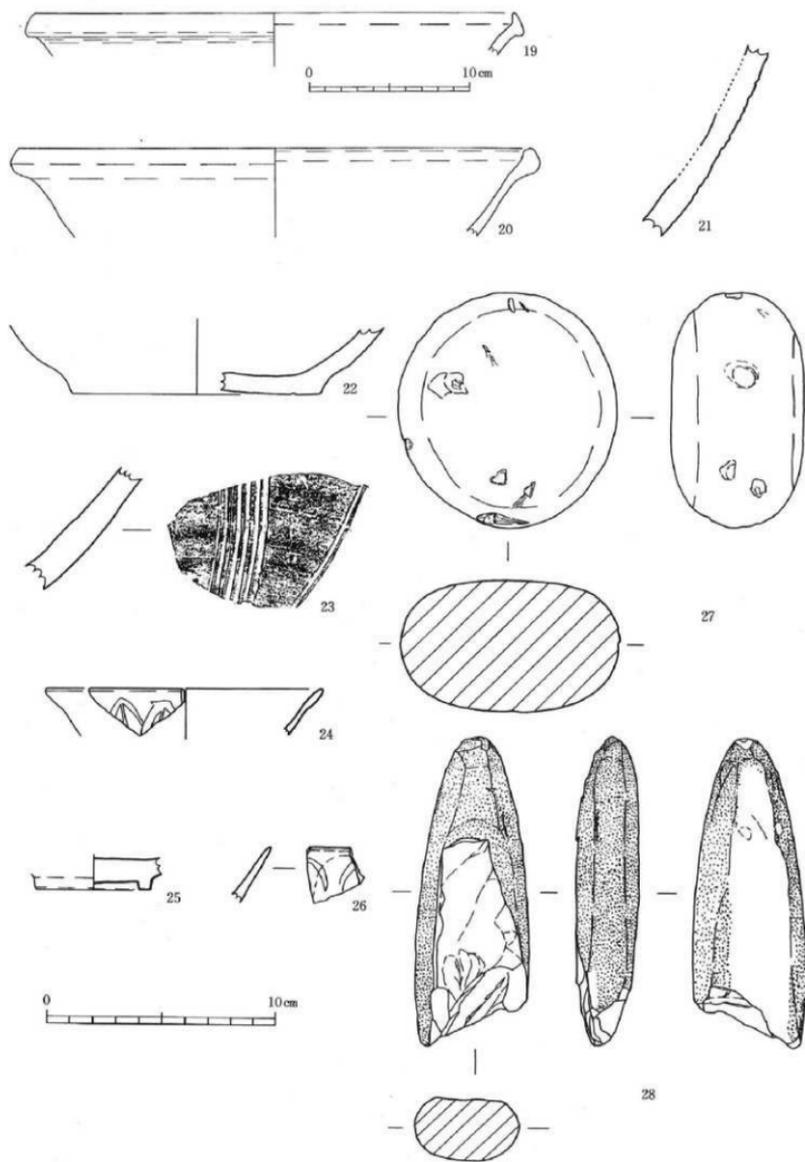
第6図 遺構配置図及び土層断面図(1)



第7図 遺構配置図及び土層断面図(2)



第9图 SD01内出土遺物実測图(1)



第10图 SD01内出土遗物实测图(2)

土坑（SC05：第7図）

D-2区、SD04の西側、SC04に南接して検出。長径1.2m、短径0.6m、深さ0.3mを測る。第12図に出土遺物を示した。34は甕の口縁部で、口唇部の突帯貼り付け痕は明瞭であり、突帯下部にその名残が認められる。胎土にウンモを含む。

土坑（SC07：第8図）

D-2区、SD03の東側、P007の東側で検出した。長径1.1m、短径0.5m、深さ0.25mを測る。

土坑（SC08：第8図）

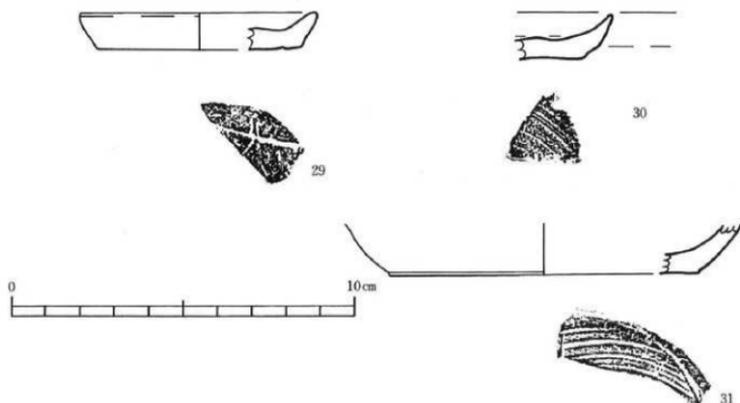
D-2区、SD04の東、SC07の南東側で確認した。長径2.2m、短径0.9m、深さ0.3mを測る。

土坑（SC09：第8図）

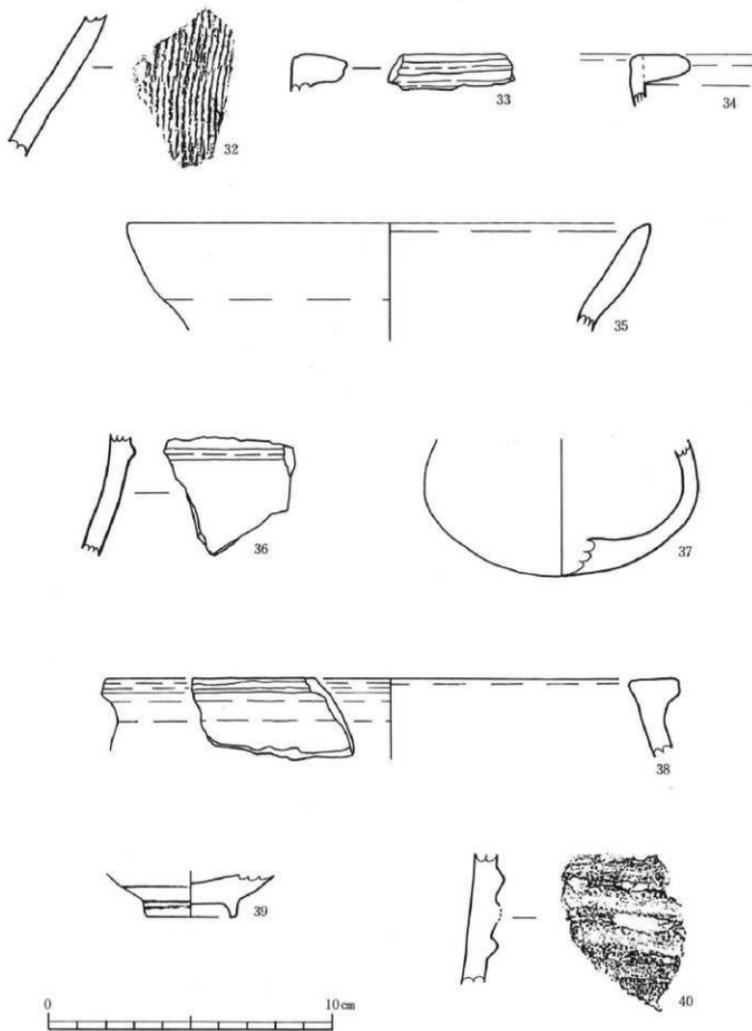
D-3区、調査区南壁沿いに確認した。長径1.6m、深さ0.3mを測る。

土坑（SC10：第8図）

E-2区、SC01と切り合った形で確認したが、断面からの時期差の確定はできなかった。長径推定2.9m、短径1.1m、深さ0.2mを測る。第12図に出土遺物を示した。35は土師質土器



第11図 SD02内出土遺物実測図



第12図 遺構内出土遺物実測図

壺の口縁部である。口唇部内面直下に稜を持つ。

土坑（SC11：第8図）

E-3区、SC01の南側で確認した。長径1.0m、短径0.8m、深さ0.2mを測る。

土坑（SC12：第8図）

E-3区、調査区南壁沿いに確認した。壁面沿いの径1.4m、深さ0.7mを測る。第12図に出土遺物を示した。37は土師質土器壺の底部である。

土坑（SC14：第8図）

E-3区、SC12の東側で確認した。長径1.3m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。

土坑（SC16：第8図）

E-3区、調査区南壁沿いに確認した。壁面沿いの径0.9mを測る。

土坑（SC17：第8図）

D-1区、調査区北壁沿いに確認した。長径1.2m、深さ0.4mを測る。

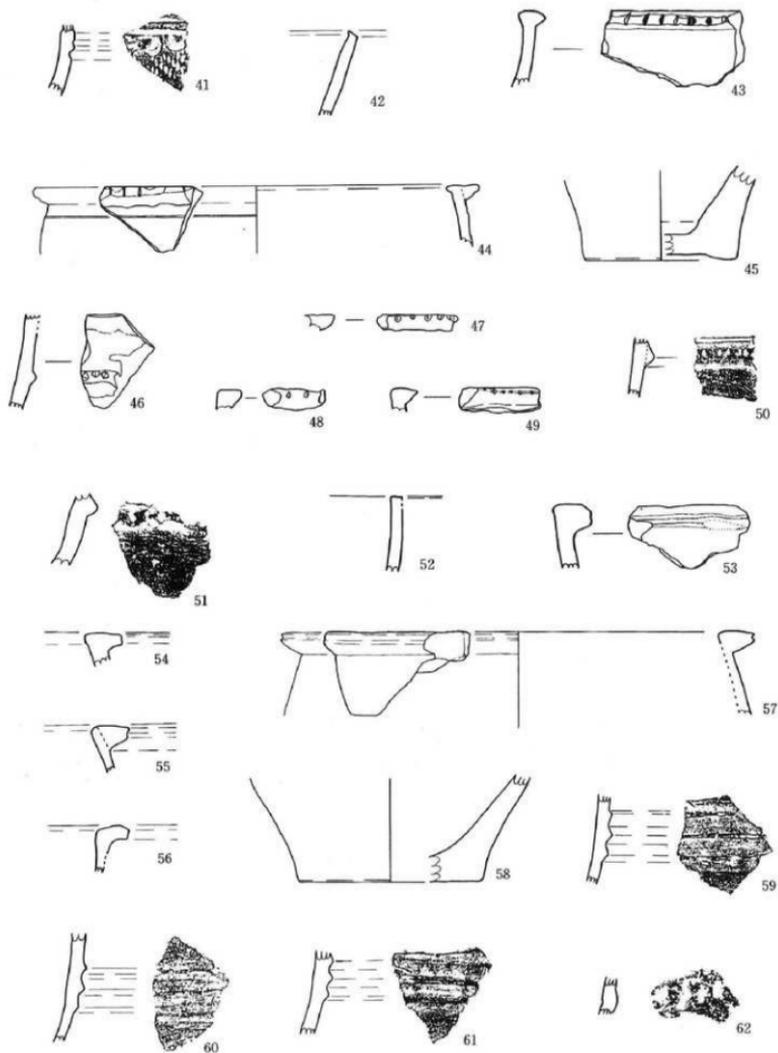
柱穴群（ピット）

1号柱穴（P001）はB-1区で確認した。北側を攪乱によって破壊されていた。埋土より土器（小片）が出土している。2号柱穴（P002）はC-2区、SD01の東側で確認した。埋土より土器（小片）が出土している。3号柱穴（P003）はC-2区で確認した。埋土より土器（小片）が出土している。4号柱穴（P004）はC-2区、P003の北側で確認した。埋土より口唇部がM字状断面の寛口縁部（遺物番号38）が出土している。5号柱穴（P005）はC-2区、P003の東側で確認した。埋土より三角突帯を有する寛の胴部（遺物番号36）が出土している。6号柱穴（P006）はD-2区、SD03東側で確認した。埋土より染付碗の底部（遺物番号39）が出土している。7号柱穴（P007）はD-2区、P006の東側で確認した。埋土より3条の三角突帯を有する寛胴部（遺物番号40）が出土している。8号柱穴（P008）はF-2区、調査区東端で確認した。

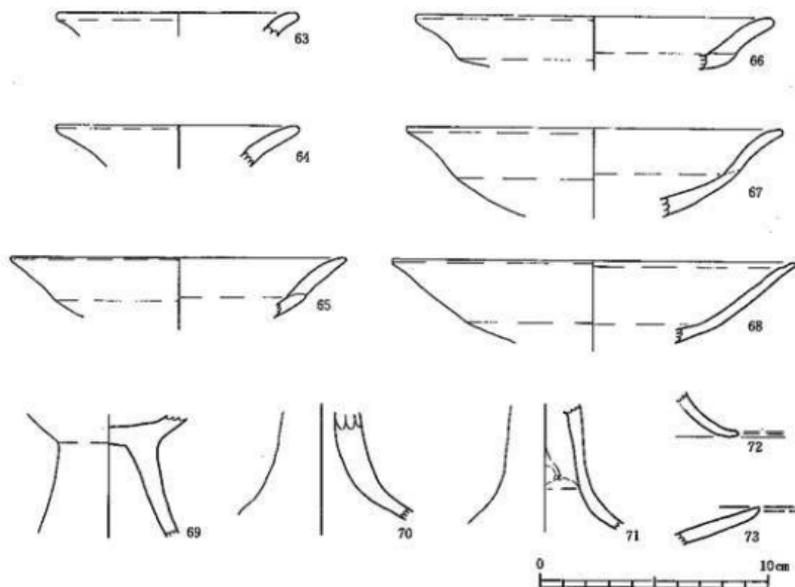
包含層内出土遺物

遺物包含層は基本土層の第Ⅲ層、オレンジパミスを含む黒褐色粘質シルト層である。同層から比較的多くの遺物を検出することができた。ここには図示しうるもののみを掲載した。

41・42は縄文土器である。41はくの字型口縁深鉢の胴部片で西平式である。42は深鉢の口縁部で、口唇部内側に凹線を持つ。型式は不明だが、このタイプは西平式・三万田式にみられるものである。43・44は寛の口縁部である。43は、やや丸みを帯びた口唇部に刻みを持つ。また

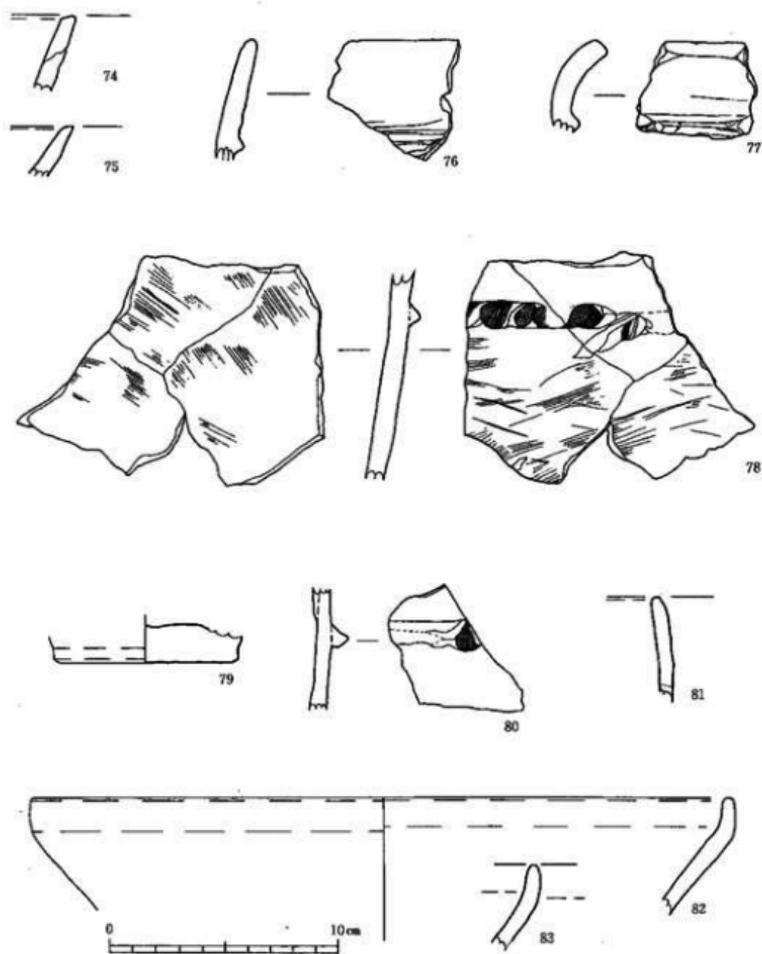


第13图 包含層内出土遺物实测图(1)

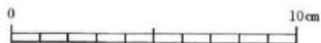
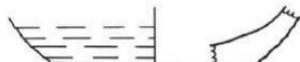
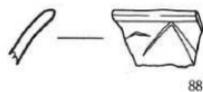
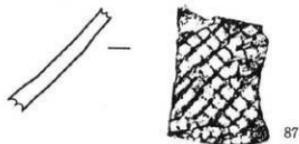
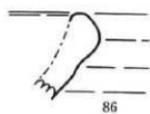
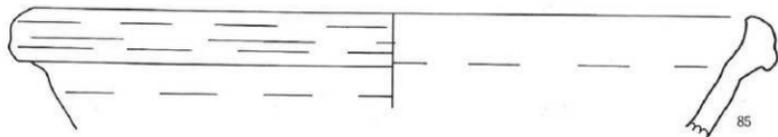
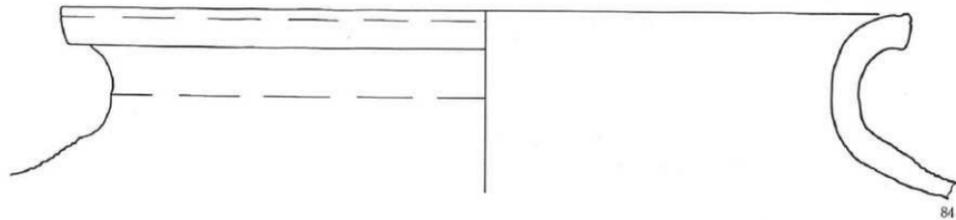


第14図 包含層内出土遺物実測図(2)

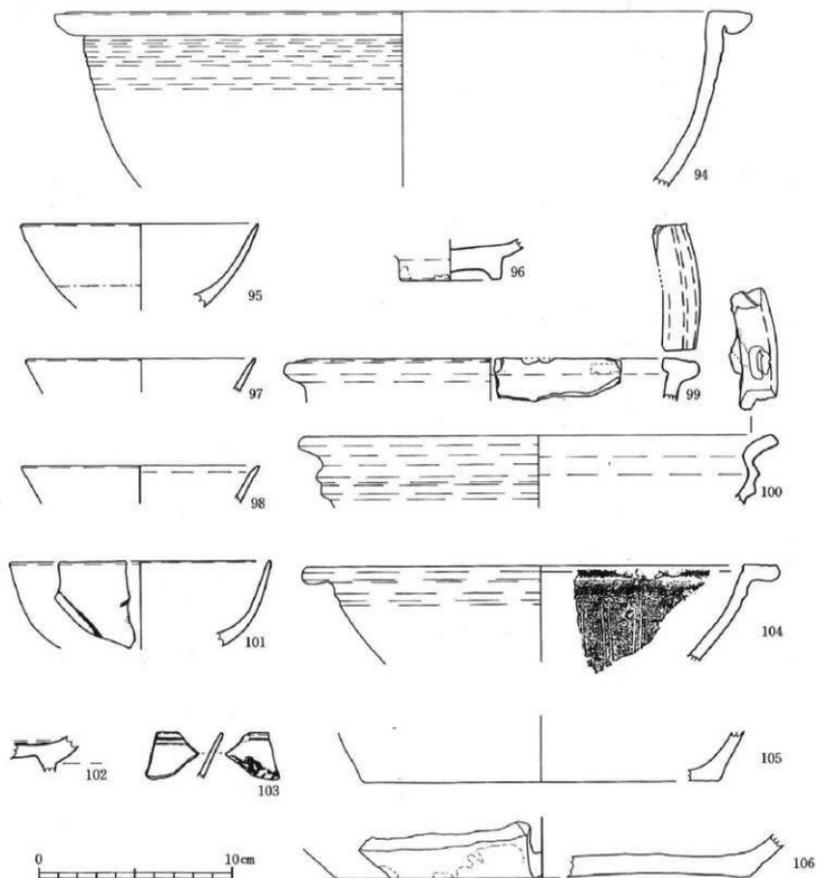
外面に横位のミガキが見受けられる。44は口唇部に刻みを持ち、突帯の貼り付けが明瞭に残る。45は壺の底部で、わずかに上げ底状を呈し、外面には縦位のハケ調整が施されている。刻み目突帯を有する46は甕の胴部片と思われる。47～49は口縁部で、全てに刻み目が見受けられる。50・51も46同様刻み目突帯を持つ胴部片である。51は突帯直下にわずかにミガキ痕が残る。52は口唇部の突帯が剥落している。52～55・57はM字状突帯寛口縁部である。56は口唇部上面に稜を持ち、突帯状の口唇部器肉は比較的薄い。胎土にはウンモを含んでいる。58は壺の底部である。59～61の胴部片は、全てに3条の三角突帯がみられる。62には外面に絡縄突帯状のものが見受けられる。63～73は高坏である。63・64の口縁部は比較的小柄なタイプである。65～67の口縁部は稜となる接合部が明瞭である。71の脚部内面にはケズリ痕が残る。72は脚部、73は坏部である。71・72は同型品かもしれない。74～78は甕である。78・80の胴部片は絡縄突帯を有し、布目が明瞭である。79は壺の底部か。82・83は鉢型土器である。82は口唇部にスガが付着しており、その下は斜位のハケ目が明瞭である。84～87は須恵質陶器である。84は壺の口縁部である。85・86は東播磨系鉢の口縁部。88は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、鋪蓮弁文が見受けられる。89～93は底面糸切り離しの土師器。94は陶器甕の口縁部。口径36.0cmを測る。95は陶器碗の口縁部。白化粘土土あり。口径12.2cmを測る。96は陶器碗の底部。底径は5.1cm。見込みは蛇ノ目斜割ぎである。97は磁器碗。98は陶器碗である。99は片口の口縁部。100は陶器の甕で、口唇部に貝目積が見受けられる。101は碗口縁部。102は碗の底部。見込みは蛇ノ目斜割ぎ状を呈する。103は柴付碗口縁部である。104は播鉢の口縁部。105・106は甕の底部である。



第15图 包含层内出土遗物实测图(3)



第16图 包含層内出土遺物実測图(4)



第17圖 包含層内出土遺物実測圖(5)

第1表 出土遺物観察表

*記載について

1) 表中の遺物番号は報告書掲載番号である。

2) 調査については以下の略号を使用した。

ナア=N ケズリ=K ミガキ=M ハケ=H

遺物 番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法			測		取上番号	備 考
				口徑	底徑	器高	外面	内面		
1	弥生土器	SD01	A-3	-	-	-			52	刻目尖帯
2	弥生土器	SD01	A-3	-	-	-	ヨコN		20	刻目尖帯
3	弥生土器 甕(口縁部)	SD01	A-3	-	-	-	ヨコN+ タテH		50	刻目尖帯・下城式
4	弥生土器	SD01	A-3	-	-	-	ヨコN		53	刻目尖帯
5	弥生土器 甕(口縁部)	SD01	A-3	-	-	-	ヨコN	ヨコN	72	
6	弥生土器	SD01	A-3	-	-	-			145	底部
7	弥生土器 甕(口縁部)	SD01		-	-	-	ヨコN		178	M字尖帯
8	弥生土器 甕(口縁部)	SD01	A-3	-	-	-			44	口唇部欠損
9	弥生土器 甕(口縁部)	SD01	A-3	-	-	-			41	M字尖帯
10	土師器 鉢	SD01	A-3	-	-	-			54	指頸痕あり 径-8.0cm
11	土師器 杯	SD01	A-3	12.1	8.5	3.4		ヨコN	23	糸切り・板状圧痕あり 外-口土調整痕明瞭
12	土師器 杯	SD01	A-3	13.2	8.6	3.6			45+ 78+80	糸切り
13	土師器 鉢	SD01		-	9.0	-			178	糸切り
14	土師器 杯	SD南埋上		-	9.0	-		N	180	糸切り
15	土師器 小	SD01		8.3	7.6	1.3			178	糸切り
16	土師器 小	SD01	A-3	7.6	5.6	1.6	ヨコN	ヨコN	77	糸切り
17	土師器 小	SD01	A-3	7.7	5.7	1.5~ 1.65	ヨコN	ヨコN	19	糸切り
18	土師器 小	SD01	D-7	8.0	6.2	1.5			178	糸切り
19	須恵質陶器 東播磨系控鉢	SD01	A-3	29.8	-	-			27	魚住系? 口縁部
20	須恵質陶器 東播磨系控鉢	SD01	A-3	32.0	-	-			26	魚住系? 口縁部
21	須恵質陶器 東播磨系控鉢	SD01	A-3	-	-	-			22	魚住系? 胴部 タタキ目あり
22	須恵質陶器 東播磨系控鉢	SD01	A-3	-	11.0	-			13	魚住系? 内-磨耗 底部 糸切り
23	陶器・備前 控鉢(胴部)	SD01	A-3	-	-	-			46	
24	青 磁 甕(口縁)	SD01		12.0	-	-			178	鎌倉弁文 龍泉窯系
25	青 磁 甕(底部)	SD01		-	5.0	-			178	
26	青 磁 碗(口縁部)	SD01		-	-	-			180	鎌? 蓮弁文 龍泉窯系
27	石製品 石	SD01 L層		-	-	-			177	
28	石製品 石	SD01	A-3	-	-	-			28	磨製
29	土師器 小	SD02	A-2	6.8	6.0	1.1			59	糸切り
30	土師器 小	SD02	A-2	-	-	-			60	糸切り

遺物番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法 量			測 定		取上番号	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面		
31	土師器 杯	SD02	A-2	-	9.0	-			67	糸切り
32	須恵質陶器	SD03		-	-	-			184	タタキ目あり 焼成不良
33	弥生土器 壺(口縁部)	SD03		-	-	-	ヨコN	ヨコN	184	M字状突帯
34	弥生土器 壺(口縁部)	SC05	A-4	-	-	-	ヨコN	ヨコN	156	ウンモ含
35	土師器 壺?(口縁部)	SC10	A-5	18.4	-	-	ヨコN		101	
36	弥生土器	PIT5	A-3	-	-	-			122	三角突帯 外一黒色
37	土師器 壺(底部)	SC12	B-5	-	-	-			92	
38	弥生土器 壺(口縁部)	PIT4	A-3	20.2	-	-	ヨコN	ヨコN	123	口唇部ス
39	赤 付 碗(底部)	PIT6	A-4	-	3.2	-			121	
40	弥生土器	PIT7	A-4	-	-	-	ヨコN		113	三角突帯
41	縄文土器 深鉢(胴部)	TEST	4T	-	-	-				西平式
42	縄文土器 深鉢(口縁部)	一括		-	-	-			166	西平式?
43	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコNのみ ヨコM		166	口唇部刻目突帯 胎土ウンモ含
44	弥生土器 壺(口縁部)	一括		23.2	-	-	ヨコN	ヨコN	162東	口唇部刻目突帯
45	弥生土器 壺(底部)	一括		-	7.8	-	タテH		162東	
46	弥生土器 壺(胴部)	一括		-	-	-			162東	刻目突帯
47	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN		170	口唇部刻目突帯
48	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-			162東	口唇部刻目突帯
49	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN		166	口唇部刻目突帯
50	弥生土器 壺(胴部)	TEST	1T	-	-	-	ヨコN			刻目突帯
51	弥生土器 壺(胴部)	一括		-	-	-	ヨコN		166	刻目突帯
52	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-			166	口唇部突帯刻目 胎土ウンモ含
53	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN		166	口唇部M字状突帯 胎土ウンモ含
54	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN	ヨコN	166	M字突帯
55	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN	ヨコN	165	M字突帯 胎土ウンモ含
56	弥生土器 壺(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN	ヨコN	165	胎土ウンモ含
57	弥生土器 壺(口縁部)	一括		24.4	-	-	ヨコN	ヨコN	166	M字突帯
58	弥生土器 壺(底部)	一括		-	9.4	-	N		161	
59	弥生土器 壺(胴部)		A-4	-	-	-	ヨコN		128	三角突帯 胎土ウンモ含
60	弥生土器 壺(胴部)		A-4	-	-	-	ヨコN		149	三角突帯 胎土ウンモ含
61	弥生土器 壺(胴部)	TEST	6T	-	-	-	ヨコN			三角突帯 胎土ウンモ含
62	土師器	一括		-	-	-			161	
63	土師器 高坏(口縁部)	TEST	4T	12.2	-	-	ヨコN	ヨコN		
64	土師器 高坏(口縁部)	一括		12.8	-	-	N	ヨコN	162東	
65	土師器 高坏(口縁部)	一括		17.4	-	-	ヨコN	ヨコN	166	

遺物番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法 量			調 査		取上番号	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面		
66	土師器 高坏(口縁部)	TEST	4T	18.8	-	-	ヨコN	ヨコN		
67	土師器 高坏(口縁部)	一括		19.8	-	-	口唇部 ヨコN	ヨコN	160	
68	土師器 高坏(口縁部)	一括		21.0	-	-	ヨコM		161	
69	土師器 高坏(脚部)	一括		-	-	-	ヨコN	N	161	内一黒色
70	土師器 高坏(脚部)	TEST	4T	-	-	-				内外一磨耗
71	土師器 高坏(脚部)	TEST	4T	-	-	-	ヨコのち タテM	K		72と同型品
72	土師器 高坏(脚部)	TEST	4T	-	-	-	ヨコのち タテM			71と同型品
73	土師器 高坏(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN		162束	
74	土師器 甕(口縁部)	一括		-	-	-		ヨコN	162束	接合部明瞭
75	土師器 甕(口縁部)	TEST	4T	-	-	-	ヨコN	ヨコN		
76	土師器 甕(口縁部)	TEST	4T	-	-	-	ヨコN	ヨコN		絡縄突帯?
77	土師器 甕(口縁部)	一括		-	-	-	ヨコN	タテN	166	口縁下突帯
78	土師器 甕(脚部)	一括	A-5	-	-	-	H	ナナメH	115 166	絡縄突帯
79	土師器 甕(底部)	一括		-	7.2	-			166	
80	土師器 甕(脚部)	TEST	4T	-	-	-	タテH			絡縄突帯
81	土師器 鉢?(口縁部)	一括		-	-	-			166	
82	土師器 鉢(口縁部)	一括		30.8	-	-	ナナメH	ヨコN	166 171	口唇部スス
83	土師器 鉢(口縁部)	TEST	4T	-	-	-				口唇部スス
84	須恵質陶器 東播磨系	TEST	6T	29.8	-	-	ヨコN	ヨコN		口縁内一沈みあり 外一タテキ目あり
85	須恵質陶器 東播磨系	一括		25.2	-	-	ヨコN	ヨコN	165	
86	須恵質陶器 東播磨系	一括		-	-	-	ヨコN	ヨコN	162	
87	須恵質陶器	TEST	1T	-	-	-				外一タテキ目あり
88	青磁 碗(口縁部)	TEST	1T	-	-	-				銅蓮弁文
89	土師器 小	TEST	6T	-	7.0	-				糸切り+板状圧痕 内一ロクロ調整痕
90	土師器 小	TEST	1T	7.6	6.2	1.5				糸切り
91	土師器 皿	一括		10.2	8.5	1.8			161	糸切り 外一スス
92	土師器 杯	一括		-	7.2	-			165	糸切り
93	土師器 杯	TEST	1T	-	8.6	-				糸切り
94	陶器 甕	一括		36.0	-	-			164	産摩系
95	陶器 甕	一括		12.2	-	-			175	白化粧土
96	陶器 碗(底部)	一括		-	5.1	-			166	足込み一輪ノ目輪割ぎ 高台内無輪
97	陶器 碗(口縁部)	TEST	4T	11.8	-	-				
98	陶器 碗(口縁部)	一括		12.3	-	-			160	
99	陶器 片口(口縁部)	一括		17.8	-	-			162束	産摩系
100	陶器 鉢(口縁部)	一括		24.0	-	-			165	産摩系 口唇部一目積痕

遺物 番号	種別・器種	遺構・層	出土区	法 量			陶 器		取上番号	備 考
				口 径	底 径	器 高	外 周	内 面		
101	陶 器 碗	一括		13.4	-	-			161	
102	陶 器 碗(底部)	一括		-	-	-			168	見込み-総ノ目軸廻り
103	土 器 付 碗(口縁部)	一括		-	-	-			166	
104	陶 器 福鉢(口縁部)	一括		22.0	-	-			166	薩摩系
105	陶 器 盤(底部)	一括		-	18.4	-			165	薩摩系
106	陶 器 壺(底部)	一括		-	21.2	-			167	薩摩系 目付痕

第5章 ま と め

今回の調査は面積も狭小で、かつ遺跡総体からみればごく部分的なものにしかならないが、これまでほとんど調査の行われることのなかった当地域の歴史的成り立ちに関する貴重なヒントを提示してくれた。特に区域内中央やや西側を南北に走る箱型状の溝状遺構（SD01）は注目すべきものではなからうか。SD01は底面がアカホヤ直下層に達し、検出面からの深さ約1.6m、検出面での最大幅は4.2mを測る。溝壁は西側が急で東側は比較的緩斜面状を呈している。東側には3条の道路状遺構と思われる硬化面を伴う。埋土中からは多数の遺物が出土しており、主に上層からは3のような下条式タイプのものを含むいわゆる刻日突帯系やM字突帯系、ほぼ前期末～中期のものと思われるものが出土している。一方、下層で検出した中世の遺物は土師器・須恵質の陶器である。陶器は魚住系のものと考えられ、そのプロポーシオンから14Cの年代を与えることができる。このことから、SD01は14C代の所産とも考えることができる。当遺跡は舌状台地の付け根部分に立地するが、SD01は舌状部を遮断するような走向軸を示しており、本遺構の機能がどんなものであったかを窺わせてくれる。

先にも述べたとおり、当遺跡は350㎡と狭い範囲内での調査であったため、これのみで各遺構の機能・性格等推し量るのは難しい。今後の当地域における調査成果等の増加を待ちたい。

引用・参考文献

- ・矢部喜多夫1986『都城市遺跡詳細分布調査（中央部）』
都城市文化財調査報告書第5集 都城市教育委員会
- ・矢部喜多夫・柴畑光博・下田代清海1990『都城市遺跡詳細分布調査（北西部）』
都城市文化財調査報告書第12集 都城市教育委員会
- ・柴畑光博・野間大作1989『都城市遺跡詳細分布調査（北東部）』
都城市文化財調査報告書第8集 都城市教育委員会
- ・矢部喜多夫・柴畑光博1987『都城市遺跡詳細分布調査（南部）』
都城市文化財調査報告書第6集 都城市教育委員会

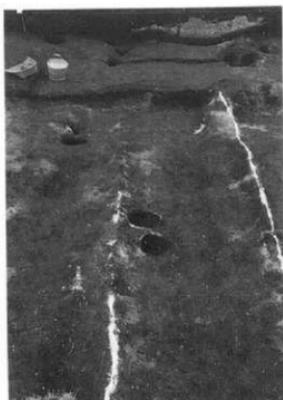
図版 1



調査区東側部分



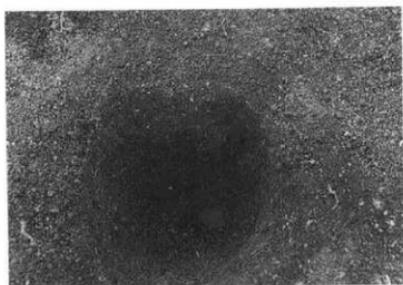
SD 01



SD 03 - 04



SD 01



Pit 内遺物出土状況

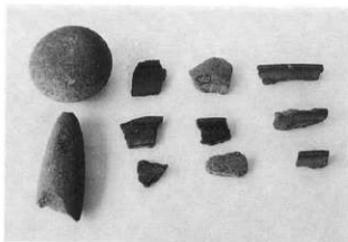


SD 01 内遺物出土状況

図版 2



SD 0 1 内出土遺物



SD 0 1 内出土遺物



SD 0 2 内出土遺物



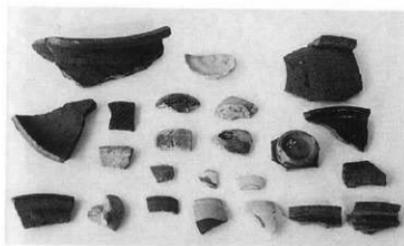
遺構内出土遺物



遺跡内出土一括遺物



遺跡内出土一括遺物



遺跡内出土一括遺物

都城市文化財調査報告書第36集

平 峰 遺 跡

民間分譲住宅地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年 平成7年3月

編集発行 都 城 市 教 育 委 員 会

〒885

宮崎県都城市姪城町6街区21号

TEL0986-23-2111

印 刷 ㈱みやこ印刷

都城市大王町51-22
